

都道府県別賞一等

一秒先も未来だから

広島県 広島市立祇園東中学校 二学年

白井 沙英

「ガンを奇跡的に克服」「奇跡的に生き延びた人たち」と、よくテレビや雑誌なんかは「奇跡」を取り上げる。私はこのような言葉を聞くのがどうも気に入らない。昨年のガン死亡数は約三十七万九百人。一日に約一〇一六人、一時間に約四十二人、一、二分で一人亡くなるということがわかる。それだけではなく、事故や災害も絶えず起こっている。誰がこれほどの死の可能性を予測して回避することができるのだろうか。人生そう上手くいくもんじゃない。「奇跡」的に死を免れた人を見ると、ふとため息がこぼれる。生きようとして生きられなかった人の無念さをどうしても考えてしまうのだ。

未来は保障されていない。だから、生命保険というものがある。もしも病気にかかったり、亡くなったり、老いて生活が苦しくなったときに保障してくれる。また、教育費を準備することもできる。加入したみんなが少しずつお金を払って集めていき、集まったお金で医療費などを保障するという仕組みだ。生命保険は私的保障なので、自分で加入するかどうかを選択できる。現在は十人中九人が加入しているといった状況だ。『みんな入ってるし、じゃあ入ろうかな』と考えてしまいたいようになるが、それは少し軽率かもしれない。なぜなら、もし病気にかかることなく、最後の生活も不便じゃなかったら、保険金を受け取る可能性は少なくなり、加入して払った分のお金ももつたいないと思うからだ。果たして、本当に生命保険に加入する必要性はあるのだろうか。

私は、入る入らないではなく選ぶ選ばないという考えを頭に入れておくことが大切だと思う。個人個人の体の状態や生活のしかた、結婚や子供のことなど、それぞれが今後抱えてしまうであろうリスクは違う。例えば、私の父は二年前に胆管ガンで亡くなった。生命保険に入っていたため、私たち家族は今お金にひどく困ることなく生活ができています。もし生命保険に入っていなければ、母は一日も休むことなく働きっぱなし、当時高校二年生だった姉は大学へ行けなかったかもしれない。このように、選んだ結果が自分の生活に大きく関わってくる。困るのは誰なのか、自身の将来を見つめて生命保険と向き合うべきだと思う。

私は、生命保険は安心を提供する「商品」だと思う。税のように義務づけられたものでなく、一人ひとりが選び、お金を払うもの。たくさんの方が支え合っていて、大きな助け合いとして生命保険は成り立っていると感じる。一分前の自分

第54回中学生作文コンクール

は今自分がしていることを予測できただろうか。二分後の自分がしていることがわかるだろうか。自分は何歳まで生きるか言えるだろうか。将来のことは心配無用と断言できるだろうか。誰も未来はわからない。万が一のときに安心を届けるのが生命保険。その万が一のことが起こるのはいつだろうか。もしかしたら一秒後かもしれない。一秒先も、未来だから。